

以上諸検査の結果より fibrous dysplasia と確定診断した。本症においては、骨シンチグラムで病変部の膨隆と集積増加がみられるのが一般的である。本症には単骨性のものと多骨性のものが知られており、特に全身骨シンチグラムはその鑑別診断に有用とされている。本症例の全身骨シンチグラムでは、病変は頭蓋底と下顎骨にのみみられ、他の骨には病変は検出できなかった。

5. $^{99m}\text{Tc}(\text{V})\text{-DMSA}$ シンチグラフィが有用であった原発性アミロイドーシスの一例

行広 雅士 館野 円 平野 恒夫
織内 昇 井上登美夫 遠藤 啓吾

(群馬大・核)

5 価の ^{99m}Tc 製剤である $^{99m}\text{Tc}(\text{V})\text{-DMSA}$ シンチグラフィが有用であった原発性アミロイドーシスの 1 例を報告する。症例は 71 歳女性。1993 年 5 月頃より軽度の心不全症状を生じていた。9 月に胆石の手術を受けた際に肝の硬化に気付かれ、術中の肝生検にてアミロイドーシスと診断された。同年秋より洞不全症候群をきたし、心不全も進行した。 $^{99m}\text{Tc}(\text{V})\text{-DMSA}$ シンチにて心筋、甲状腺が描出され肝・脾への集積も強く、アミロイドの沈着が示唆された。その後患者の全身状態は増悪し、1994 年 3 月死亡した。病理解剖学的診断は原発性アミロイドーシス (AL 型) で、アミロイド沈着は甲状腺、心、肝、脾、腎のほか、肺、骨髄、副腎、顎下腺などにも認められた。 $^{99m}\text{Tc}(\text{V})\text{-DMSA}$ シンチの所見とアミロイドの沈着部位はほぼ一致し、 $^{99m}\text{Tc}(\text{V})\text{-DMSA}$ はアミロイドーシスの診断、病変の広がりを知るのに有用と考えられる。

6. 骨シンチグラフィで異常集積を示した肺胞隔壁型肺アミロイドーシスの 1 症例

鈴木 謙三 藤井 博史

(都立駒込病院・放診)

石井 晴之 後藤 元 (同・呼内)

栗林 徹 奥山 康男 (川崎市立病院・放)

久保 敦司 (慶應大・放)

64 歳の男性のびまん性肺胞隔壁型肺アミロイドーシスの 1 症例を経験した。骨シンチグラフィで興味ある所見が得られたので報告する。胸部 X 線写真で両肺に粒

状影が認められ、HRCT で主に小葉中心性の分布を示すび漫性の肺病変が認められた。これらの画像上、石灰化は確認できなかったが、骨シンチグラフィで、両肺に異常集積を認めた。SPECT 像で肺野病変に一致したび漫性の集積が確認された。TBLB でび漫性肺胞隔壁型アミロイドーシスと診断された。組織像でも明らかな石灰化や骨化は認められなかった。アミロイドーシスでは、組織中の Ca 濃度が高いことが報告されており、これが骨シンチグラムでの陽性所見に関係しているものと考えられる。これまで、肺アミロイドーシスの骨シンチグラフィはあまり報告されていないが、本疾患はび漫性肺炎患で骨シンチグラフィが陽性を示した場合の鑑別診断の 1 つとして考慮されるべきと考えられた。

7. 乳癌患者の骨転移検索を目的とした骨シンチグラフィにおける胸部側面像の有用性の検討

奥 真也 井上 優介 渡辺 俊明
熊倉 嘉貴 西川 潤一 佐々木康人

(東大・放)

乳癌の骨転移検索を目的とした骨シンチグラフィにおいて胸部側面像を加える意義を評価した。対象は平成 6 年 2 月から 6 月に当施設で骨転移検索を目的として骨シンチグラフィを施行した乳癌患者 51 例である。

$^{99m}\text{Tc}\text{-MDP}$ 740 MBq 静注後 3~4 時間後に全身像と胸部側面像を得た。読影の際、最初に、核医学を専門とする医師 3 名の合議により、全身像のみによる診断を行った。次に胸部側面像を加えて再度読影し、診断の変更の有無を検討した。

その結果、胸部側面像が有用とされたものは 15 例であった。そのうち、全身像で認められない異常集積を検出したものが 6 例、疑診病変を確診しえたものが 3 例、疑診病変を除外しえたものが 5 例、確診病変に詳細な情報を付加できたものが 2 例であった。また、胸部側面像は有用でないとされたものは 36 例であり、うち、全身にまったく異常所見のないものは 21 例であった。

胸部側面像の撮像は、全身像のみの撮像に加えてわずかの検査時間の増加で、患者の負担を増さずに施行可能である。本検討により、胸部側面像の撮像が有用である可能性が示唆された。